

学位論文及び審査結果の要旨

横浜国立大学

氏名	長谷部 めぐみ
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	環情博甲第333号
学位授与年月日	平成26年3月26日
学位授与の根拠	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)第4条第1項及び横浜国立大学学位規則第5条第1項
学府・専攻名	環境情報学府 情報メディア環境学専攻
学位論文題目	The Acquisition of the WH-Movement Operation in English by Japanese EFL Learners (日本人英語学習者における英語のWH移動操作の習得)
論文審査委員	主査 横浜国立大学 教授 有澤 博 横浜国立大学 教授 田村 直良 東京女子大学 教授 森 辰則 横浜国立大学 准教授 マーティン ロジャー 横浜国立大学 准教授 藤井 友比呂 岐阜大学 准教授 牧 秀樹

論文及び審査結果の要旨

本博士論文は、非母語話者による第二言語の習得をテーマにし、特に日本人英語学習者によるWH疑問文の習得について心理言語学の立場から論じている。本論文が枠組みとする生成文法理論は、普遍文法(UG)と呼ばれる生得的認知能力を仮定し、疑問詞の位置の違いなどの個別言語間の差異の獲得は、UG原理に付随するパラメタと呼ばれる可変的スイッチの値を、受ける言語刺激に応じて設定するプロセスであると定式化される。母語話者は、それぞれの目標言語に応じて、疑問詞位置パラメタ等の値の設定を行うのである。本博士論文が扱う第二言語習得分野では、第二言語習得にUGとパラメタがどう関わりうるのかが注目されている。当該学生は、先行研究で提案されている三つの仮説をテストした。UGのみで第二言語習得を行うUG純利用(Full UG Access)仮説、母語知識のみを活用するUG非利用(No UG Access)仮説、母語知識も活用しUGも機能する転移(Transfer)仮説である。これら三仮説をテストするために、日本人英語学習者を対象に、日本語と英語で疑問詞位置パラメタの設定の異なるWH疑問文(英語はwhoなどのWH語が節の先頭に移動するが、日本語はWH語が移動せず、元位置に留まりうる)の第二言語獲得を心理言語学的手法で吟味し、三種類の産出型・知覚型の実験を行った。実験の結果、上級者の言語習得ではUGが機能している可能性が示唆されるが、そうなるまでには時間がかかることが示された。その結果、得られた実験データは母語知識の関与から獲得の遅れが生ずる転移仮説を支持すると結論付けている。本論文の成果としては、まず日本人英語学習者のWH移動の習得研究についての経験的基盤を与えたことが挙げられる。また、本論文が明らかにした非上級者、上級者の一般的英語運用スキルと疑問文形成のような個別文法知識の間の相関関係は、今後の英語教育に実用面で大きく寄与するであろうことも特長的な点と言える。

論文構成は以下の通りである。第一章では、WH移動、第二言語習得モデルなどの理論的背景を述べ、第二言語学習者によるWH移動習得の先行文献を概観した上で、研究目的を提示し、本論文で期待される成果について論じている。第二章では、英語能力テストについて説明している。第三章及び第四章では、日本人中学生/大学生に対して行った短距離WH移動の産出型実験(実験(A))について扱っている。第五章から第七章では、that-痕跡効果を含む長距離WH移動の知覚型実験(実験(B))を、英語母語話者をコントロールグループとし、日本人大学生及び他のアジア圏の大学生に対して行なった結果を基に、第二言語習得

と UG の関連性を調査している。第八章は、実験(B)の結果を検証するために行った、異なる制約である優位性効果を含む多重 WH 文に関する知覚型実験（実験(C)）を扱っている。第九章では、統語論の先行研究を基に、以上 3 つの実験の考察を行ない、上級者に UG の制約が機能している可能性が強いことから、一定の学習レベル以上において、日本人英語学習者の英語の WH 移動の習得で UG が機能し、かつ母語の知識が習得に影響を与えていることを考慮し、転移仮説が有望であると議論している。第十章は結論である。

一連の実験及び分析から、日本人学習者による英語の WH 移動の習得について詳細に調査し、習得状況に理論的な裏付けを与え、第二言語習得モデルの解明に多大な貢献を行い、外国語教育に重要な示唆を与えている。既に、査読付き正論文が 2 編あり、正論文に相当する査読付き国際会議論文も 2 編公表されており、国内外で様々な発表を通じて学会でも高い評価を受けている。

以上から、本論文は博士(学術)の学位論文として十分に値すると審査委員が全員一致して認め、平成 26 年 2 月 7 日（金）、総合研究棟 2 階 201A 室において 13 時から 14 時 15 分まで博士論文公聴会を開催した。その後、同室において審査委員全員出席のもと、当該学生の博士論文最終試験を行った。

始めに当該学生より博士論文の「The Acquisition of the WH-Movement Operation in English by Japanese EFL Learners (日本人英語学習者における英語の WH 移動操作の習得)」について発表があり、続いて博士論文に関連する学術論文の公表状況、大学院講義の単位取得状況などについて説明があった。

これに引き続き質疑応答を行った。審査員からは博士論文に関する質問、一般専門知識に関する質問などがあり、学力及び博士号取得資格の確認を行なった。公表論文については、査読付き正論文 2 編が採録されていることから、博士号取得の資格を充分満たしていることを確認した。外国語については、本人が国際会議において英語で発表していることから学力を確認した。また、履修単位が修了要件を満たしていることを確認した。以上により、当該学生は最終試験に合格であると、審査委員全員一致で判定した。

これに基づき、環境情報学府 情報メディア環境学専攻会議にて審議し、全員一致で本論文を博士(学術)の学位論文としての価値があるものとして環境情報学府教授会に付議することを決定した。その後、環境情報学府学務委員会での確認を経て、平成 26 年 3 月 3 日に開催された環境情報学府教授会において審議並びに無記名投票により、当該学生に博士(学術)の学位を授与することを決定したものである。

注 論文及び審査結果の要旨欄に不足が生じる場合には、同欄の様式に準じ裏面又は別紙によること。